

## (第二十六章)

章の著述其々の意味を説く>縁起を了解する・しないことからの、輪廻への入出の仕方> [章の著述を説く]

ここに言う。「君が、大乘の教説によって勝義へ入ることを既に示したけれど、ここで君が声聞の教説の勝義に入ることを示したまえ。」

章の著述を説く>順行の縁起> [放つものの因果]

ここで説く。

無明が覆い隠したことによって、再びの輪廻の為に、  
三様相の諸行を、  
顕現して行うものである  
それらの業によって、衆生へと赴く。 1  
行の縁を持つ識は、  
諸衆生へと入り込むことになる。  
識が入ったとなれば、  
名と色になることになる。 2  
名と色になったならば、  
六處が起こることになる。  
六處に依拠して、  
それより触が起こるとなる。 3  
名と色形と念じるものに、  
依拠して生じるのみであり、  
そのように名と色形に依拠して、  
識が生じるとなる。 4  
眼と色形と識の、  
三つが集まったもの。  
それが触である。その触より、  
受が全く起こるとなる。 5

順行の縁起> [成すものの因果]

受の縁によって愛であり、  
受の為に愛すとなる。  
愛となれば取。  
四様相の取となる。 6

取が有れば、取る者の  
 有がよく起こるとなる。  
 もし、取が無ければ  
 解脱するとなり、有にはならない。 7  
 その有も五蘊である。  
 有よりは生が起こる。  
 老死と、悲痛と、  
 慟哭と、苦と、 8  
 心不楽と、混乱等、  
 それらは生より、よく起こる。  
 そのように苦の蘊、  
 このただそれだけが、起こることになる。 9

章の著述を説く > [逆行の縁起]

それ故に、賢者達は輪廻の、  
 根本の行を行わない。  
 それ故に、不賢の者は行為するものである。  
 不賢の者は、まさしくそれを見る故である。 10  
 無明が滅したとなれば、  
 諸行も起こるとはならない。  
 無明が滅すとなることは、  
 知が真如を修したことによってである。 11  
 それやそれが滅したことによって、  
 それやそれは実現しない。  
 苦の蘊ただそれだけのもの。  
 それは、そのように正しく滅す。 12

幼子は無明が覆い隠したことによって再度生を受ける故に、衆生は地獄等を  
 組み立てる三様相の諸行<sup>1</sup>を、身体と言葉と意によって顕現して行ふ。斯様に顕  
 現して為された大中小の何れかであるそれら善と不善の業によって、有情は地  
 獄等の諸衆生へと赴く。

<sup>1</sup> 三様相の諸行：三様相の業。業は動機によってなされた行為。有形とする学派と、心の一時的な働きにおく学派がある。  
 三様相は善・不善・不動（色界・無色界への転生が確定した動かない業）、または身体・言葉・心意の業。

そこで行である縁を持つ識<sup>2</sup>が、斯様に諸衆生へ入り込んだことによって、名と色<sup>3</sup>が出来上がるとなる。

名と色が出来上がったとなれば、名色になったものより六處<sup>4</sup>が起こるとなる。

六處に依拠して、それより触<sup>5</sup>が起こるとなり、その触が起こる次第はこうである。名と色と作意に依拠して生じるのみであり、そのように名色に依拠して識が生じるとなり、そのように名と色と識の三つが集まったものが触である。

触より受<sup>6</sup>が全く起こるとなる。

受である縁によって愛<sup>7</sup>であり、受の意味に対して愛すとなる。

愛すととなれば、諸々の四取<sup>8</sup>を近く取るとなる。

取があれば、近取者の有<sup>9</sup>がよく起こるとなり、もし取が無ければ、然れば解脱するとなり、その者の有が起こるとはならないものである。しかし、何故ならば取と共にある故に、有が起こるとなり、その有も五蘊であると知りたまえ。

有より生が起こるのである。

生より老死と、悲痛と、慟哭と、苦と、心不樂と、混乱等が起こり、そのように、この混じり気の無い苦の集合のみである苦の蘊が起こるとなる。

それ故に、賢者達は輪廻の根本である諸行を行わない。それ故に、不賢の者は諸行の行為者であるが、賢者達はそうではない。それは何故かといえ、真如を見る故であり、そこで無明が滅したとなれば、諸行も起こるとはならない。

「無明が滅すとなる」は、まさしく十二支分を知り修習されることが習熟さ

<sup>2</sup> 識：意識の認識主体的な部分。時間的継続性があり、業が為され滅した時に、業の潜在的なエネルギーが蓄積される（因時）。後に条件が整った時（果時）に業が活性化される。

<sup>3</sup> 名と色：「色」は身体的な集積の色蘊。「名」は知覚作用等の集積である四つの蘊（受蘊（感受作用の集積）、想蘊（識別作用の集積）、行蘊（他の四以外の行い等の集積）、識蘊（心王〈知覚作用において観察者として見ている部分〉の集積。六識ある。）。あわせて五蘊になる。

<sup>4</sup> 六處：六つの感覚器官。眼・耳・鼻・舌・身体・識。

<sup>5</sup> 触：外的対象を捉える知覚が生じる条件となる、対象と感覚器官と知覚の接触。名（作為と共にある意識・無等間縁）、色（感覚器官・増上縁）、対象（所縁縁・色に従属する）、作意（一時的な意識作用・無等間縁）、が集結すること。

<sup>6</sup> 受：感受作用。楽・苦・苦楽どちらでもない感受の三種。

<sup>7</sup> 愛：今生で享受した好ましい対象に対する欲望。

<sup>8</sup> 四取：「取」は来世の蘊を取らせる強い欲望。四種に分類される。欲取（欲望に依拠した取）・見取（見解に依拠した取）・戒禁取（誤った修行の取捨に依拠した取）・我語取（我と我がものに依拠した取）。

<sup>9</sup> 有：第三縁起の識で蓄積された業の潜在的エネルギーが活性化されて、輪廻での来世を「有」にした状態。活性化した業。

れることと、まさしく安定堅固としたことによってである。それやその有（輪廻）の支分が滅したことによって、それやその有（輪廻）の支分は顕現して起こらず、そのように、混じり気のない苦の集合のみである苦の蘊は正しく滅し、永久に滅すとなる。

それらの有（輪廻）の十二支分に入ることは、詳細には経部と阿毘達磨より理解したまえ。要約して、ここでも述べた。

縁起を了解する・しないことからの、輪廻への入出の仕方＞ [章の名を示す]

「有（輪廻）の十二支分を考察する」という第二十六章である。

DECHEN 訳